高等学校

平 成 11 年 度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

平成11年度

教育研究員（高校・地理歴史）名簿

学区	学校名	氏名
世界史	都立羽田高等学校	小林章浩
	都立豊島高等学校	光森佐和子
	都立多摩高等学校	中根利和
日本史	都立大森東高等学校	古川博久
	都立広尾高等学校	鈴木純平
	都立大泉学園高等学校	中家健
	都立忍岡高等学校	外川裕一
	都立紅葉川高等学校	河合敦
	都立山崎高等学校	會田康範
	都立秋川高等学校	松浦明博
地理	都立羽村高等学校	石井哲也

担当

東京都教育庁指導部高等学校教育指導課　指導主事　高橋基之

都立教育研究所企画調査部　指導主事　横田浩二

研　究　主　題

国際社会に生きる人間として、自ら課題を追究し、行動する資質を養うための授業展開の工夫

目　　次

主題設定の理由と研究の経過 …… 2

Ⅰ　人や物の移動による文化形成 …… 3

1　インドのスパイスがもたらした世界の食文化への影響 …… 3

2　人の移動による台湾社会の変遷 …… 5

3　アイルランドのジャガイモ飢饉 …… 7

4　人類史上における縄文文化の意味

――縄文人の交易（人と物の移動）―― …… 9

Ⅱ　日本と諸外国との接触から派生してきた問題 …… 11

1　沖縄の歩みと諸外国との関係 …… 11

2　日本産の銅が清国に与えた影響 …… 13

3　欧米列強のアジア進出と早期開国の可能性 …… 15

4　統一に向けたヴェトナムの独立運動に日本 …… 17

Ⅲ　日々の生活の場から歴史をみつめる …… 19

1　和風住宅の源流をさぐる …… 19

2　河川と共に育んできた流域の生活と文化

――多摩川流域を素材として―― …… 21

3　旧東海道沿いに見る民間信仰 …… 23

まとめ …… 25

研究主題

国際社会に生きる人間として、自ら課題を追究し、行動する資質を養うための授業展開の工夫

主題設定の理由と研究経過

急速な経済の発展にめざましい交通・情報網の発達に伴って、国際社会においてどのように主体的に生きていくかが求められている。また、国際化の進展は、日本や世界の地域社会の生活や文化というものを見つめ直すということも大きな課題である。

このような社会の大きな変化に対応し、子ども一人ひとりに「生きる力」を培うことを基本的なねらいとして新しい学習指導要要領が、昨年告示された。生徒が自ら考え、自ら学ぶ学習の在り方を追究することが求められており、本部会では以下の三つのテーマを設定し、生徒が、幅広く問題意識を持たせ課題を追究する心、そして実際に行動する力を育成し、充実した生活を送ることができるようにすることを目指し、この研究に取り組んだ。

Ⅰ　人や物の移動による文化形成

交通・通信手段の発達により、国際的な結び付きが今後ますます深まっていくであろう。世界の異なる地域の間で人と物の交流が盛んである。しかし、過去の歴史においても、盛んな人と物の移動は存在していた。そして、人的・物的な移動はより豊かで新しい文化を創り上げてきた。このような文化の接触から新たな文化形成するにいたる過程を学ぶことは、現代世界のかかえる諸問題を考察する糸口となるであろう。そこで、本グループでは、人・物の移動や交流から生じる異文化の接触がより豊かで、新しい文化を形成する可能性に注目し、「スパイス」「台湾」「アイルランド」「縄文文化」を題材に、国際社会の中で他者との共生を目指して生きる資質を育成する授業展開の工夫を試みた。

Ⅱ　日本と諸外国との接触から派生してきた問題

現在、交通・通信網の発達や情報化の進展に伴い、世界が相対的に縮小していくなかで急速に国際化が進んでいる。このような現代の国際社会のなかでは、生徒自身が国家のわくを越えて互いの価値を認めあい、同時に自分の意志を相手にはっきりと伝達する資質を養っていくことが、より必要である。この課題の解決のためには、過去の事例を学び、歴史的事実に対する認識を深めさせることで、その中から得た知恵や教訓を将来に生かしていくことが不可欠となる。そこで本グループでは、諸外国との接触から派生してきた問題を取り上げ、授業展開の工夫を試みた。

Ⅲ　日々の生活の場から歴史をみつめる

社会全体が国際化し、様々な異文化に接する機会が増えている。異文化を理解していくことも重要だが、それ以上に自己の足元を見つめることが大切である。日々の生活の場には、実に多くの過去から引き継がれてきた風俗・習慣等が多く、私たちの生活もその影響を多分に受けている。また、身近に触れている自然や風景も人為的に変化してきているという意味で、歴史的にとらえることが大切である。本グループでは、現代生活の中で通常接している事象や自然を歴史的に考察するという視点で教材化を図り、生徒の主体的な活動を促す教材をもりこみながら系統的な学習内容を理解できるように配慮した。具体的には、和風住宅の源流を探る学習、多摩川流域を素材とした地域史学習、地域社会に残る民間信仰を探る学習を研究テーマとした。

Ⅰ　人や物の移動による文化形成

1　インドのスパイスがもたらした世界の食文化への影響

(1)　**教材として取り上げた理由**　　インドの食文化を特徴づける代表的なものとしてスパイスがある。大航海時代、ヨーロッパの人々は胡椒の直接貿易を求めてインドを目指し、命がけの航海に出た。そして、胡椒をはじめ、世界に広まったスパイスは、世界各地でそれぞれの食文化の充実に大きく貢献してきた。この熱帯地域特産であるスパイスは、インドの食文化を特徴づけるものである。また世界の食文化に取り入れられ、新しい食文化の形成に一役買ったものとして取り上げることができる。これらは身近なものから国際社会に目を向けさせていくことをねらいとしている。そして、スパイスを一つの例として、熱帯作物の生産から流通に至るまでの今日的な課題を考察させ、生徒が自ら考え、課題を追究していくことができるよう本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は3時間構成の第2時限に当たる。第1時限では、わが国の生活文化とは異なり、主としてヒンズー教に基づいたインドの生活と文化について紹介する。本時はスパイス（とりわけ胡椒）に焦点をあてながら、インドの食文化について考え、そのスパイスが世界の食文化に大きな影響を与えてきた点について考察する。第3時限では、授業時間外に実際に有志の生徒とインドカリーをつくり、その様子をビデオにおさめ、全員でその調理過程を見た上でインドさながらに手を使って味わってみる。学習指導要領での関連分野は、「地理Ａ」の「(2)地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」の「ア　諸地域の生活・文化と環境」、「地理Ｂの(2)現代世界の地誌的考察」の「イ　国家規模の地域」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○スパイスを使ったインド料理 ○スパイスとはどのようなものか	○カリー、タンドリーチキンやチャイについて紹介する。特にカリーについてはインドではどのように食べられているか（頻度、材料、味など）紹介する。 ○スパイスの種類（胡椒、シナモン、丁字など）と特色など生徒が調べてきたことを発表しあい、人間の食生活におけるスパイスの効果（防腐、食欲増進、味付け、香り付け他）を生徒どうしで意見交換しあう。	主なスパイスのサンプルを回覧 資料「スパイスとは」
	○大航海時代ヨーロッパ人を遠洋航海にかりたてたインドの胡椒	○その昔、インドの胡椒がヨーロッパで金と同等の価値をもっていたことを説明し、大航海時代にはバスコ・ダ・ガマやカブラルらがインドと直接貿易を行うために命がけの航海を行ったことを紹介する。	ワークシート 「大航海時代の遠洋航海」

展開	○日本にも伝わったインドのスパイス料理 ○世界の料理に使われるようになった胡椒	○昭和初期、ラス・ビハリ・ボースによって日本に伝えられたインドカリーのエピソードを紹介し、カリーが今日かたちを変えながらも日本人の食文化の一つとして大きく根付いていることを確認する。 ○胡椒を使った世界各地の代表的な料理を紹介しあう。	資料「新宿中村屋として（日本に初めてインドカリーを伝えた人）」 ワークシート「胡椒を使った世界各地の料理」
まとめ	○スパイスの意義 ○熱帯作物の生産・流通における問題点と課題	○胡椒その他のスパイスはインドの食文化において不可欠なものであると同時に、世界の食文化に影響を与え、充実した世界の食文化の形成に一役買ったものであることを確認する。 ○スパイスほかいくつかの熱帯作物が、すでに世界の食文化においてはなくてはならないものであることを確認し、それら熱帯作物の生産や流通においてよく見られる問題点や今後の課題についてまとめる。	レポート課題「生産や流通において問題をかかえる熱帯作物」

(4) **評価の観点**　①スパイスがインドの食文化を特徴づけるものとなっていることを把握できたか。②スパイスが世界の食文化に取り入れられ、世界の食文化を充実させるものとして大きな存在となっていることを理解できたか。③スパイスやその他の熱帯作物が、生産から流通に至るまでの課程で様々な問題をかかえていることを理解し、今後の課題を考察できたか。

(5) **指導上の留意点**　①「大航海時代」や「日本にはじめて伝わったインドカリー」については史実の説明に深入りしすぎないように注意する。②展開の最初の項目で、インドで安価なスパイスが、なぜヨーロッパでは高価になったか生徒に考えさせる。（考えるヒントとしてヨーロッパ人はインドとの直接貿易を望んだことをあげる。）③世界各地の料理の紹介においてはよく知られているもので、生徒がわかりやすく興味・関心をもてるようなものを示す。④熱帯作物の生産・流通におけ問題点と課題の考察は、生徒が取り組みやすくなるように状況を見て作物名を提示したり、事例を一つ二つ紹介したりする。

また、生徒が調べてきた問題点の補足説明には、特にプランテーションやモノカルチャー経済、大地主制度の形成などに焦点をあてて説明し、熱帯作物の生産地域はかつての植民地であって、いまだにその影響が大きいことを理解させる。

2　人の移動による台湾社会の変遷

(1)　**教材として取り上げた理由**　　かつて日本の植民地であった台湾の歴史は外交関係が途絶えたためか、同じ過去をもつ朝鮮半島に比べてあまり詳しくは知られていない。南方の隣島の事情を知る意味からも、日本の歴史を知る意味からも、台湾の歴史を知ることは、非常に意義がある。

また、台湾の今日までの歴史は、人の移動に伴う社会変化の繰り返しであった。マレー・ポリネシア系の先住民が暮らしていた台湾に、17～19世紀に中国大陸南部から福建系・客家系の人々が移住し、やがて多数派となった。日清戦争後の1895年に日本領となると、日本人が支配者としてやって来た。第２次世界大戦後の1945年に台湾は日本領から中華民国領となり、その後の1949年には大陸で中国共産党との内戦に敗れた国民党の一団が支配者としてやって来た。これらの人の移動と支配者の交替に伴い、台湾の社会・文化の状況はその都度大きく変化した。台湾の歴史は、人の移動に伴う社会的な変化を考察する上で非常に参考となるであろう。

現在、台湾は東アジアの新興工業地域（ＮＩＥＳ）の中で有力な地位を占め、日本との経済的な結び付きは強い。また、東アジアの政治情勢の中で、台湾の前途が国際的な注目を集めている。今後の日本にとり、台湾は様々な意味で関心を向けるような存在となるであろう。

以上のような背景から、現代の日本の高校生が台湾に目を向け歴史的・地理的に学習することは、国際理解および自国理解の観点から意義があると判断し、教材として取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は４時間構成の第２時限に当たる。第１時限では「日本の開国と日清戦争」を取り上げ、日本の台湾領有を学習する。本時では台湾の歴史を概観するが、その際に「人の移動に伴う社会の変化」に焦点を当てる。第３時限では「清に押し寄せる帝国主義」を取り上げ、戊戌政変と日露戦争について学習する。第４時限では「アジアの人々の目覚め」を取り上げ、辛亥革命を学習する。なお、本時は特定の地域・特定の事象を取り上げるテーマ学習として扱うこともできる。学習指導要領での関連分野は、世界史Ａの「(2)一体化する世界」の「エ．アジア諸国の変貌と日本」、または世界史Ｂの「(4)諸地域世界の結合と変容」の「エ．世界市場の形成とアジア諸国」および「オ．帝国主義と世界の変容」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・台湾の言語の複雑な状況	○台湾の多言語の状況を実体験するために、ＣＤで国語（北京語）、台湾語（福建語）、ツォウ語（先住民語のひとつ）を聞いてみる。 ○台湾のテレビでは、放送言語を聞いて理解できない人のために字幕がよく出ることを確認する。	・資料「世界ことばの旅」のＣＤ

展開	・清代までの台湾 ・日本の植民地の時代 ・中華民国の時代	○台湾の先住民がマレー・ポリネシア系の諸民族であり、現在は東部の山地に住んでいることを資料で調べる。 ○オランダの台湾占領、その後に明朝支持の鄭成功(ていせいこう)の台湾占領、さらに清朝による鄭氏政権打倒と台湾占領へと続く歴史を資料で調べる。 ○清が領有した台湾に、中国大陸南部で福建系や客家系の人々が移民した経過を資料で調べる。 ○台湾が日本の植民地となった契機は日清戦争であることを資料等で調べる。 ○日本語が広く通用するようになったのは学校教育によることを資料等で理解する。 ○日本人と台湾人の関係について確認する。 ○日本の敗戦に伴い台湾が中華民国に帰属したこと及び社会・文化の変化について資料等で調べる。 ○国民党軍人と台湾人とが衝突した二・二八事件がなぜ起こり、徹底的に弾圧された台湾人がその後にどのようになったのかを資料等で調べる。 ○1949年に大陸で国民党が中国共産党に敗北したこと、蔣介石(しょかいせき)の国民党政権の関係者が多数で台湾に逃れたこと、その結果、大陸出身の外省人(がいしょうじん)が台湾出身の本省人(ほんしょうじん)を政治・経済・社会・文化の面で支配する体制ができたことを資料等で調べる。	・資料「先住民族を図解する」 「大陸から台湾への移民」 「台湾人の構成早見表」 「激動の近代史ダイジェスト」 「年表」 「図表」 「台湾香港Q＆A100」より抜 “台湾人の民族構成は？”“台湾人の対日感情は？” “外省人と本省人の対立はなぜ？” “台湾はなぜ中華民国なのか？” 「ワークシート」 その他
まとめ	・人の移動に伴う変化 ・現在の台湾の状況	○台湾の社会・文化の中心勢力の交替が台湾の複雑な歴史を形成したことを確認する。 ○本省人の李登輝(りとうき)総統の登場と民主化の進行により台湾の政治・経済・社会・文化の状況が急変していることを確認する。	

(4) **評価の観点**　①台湾が民族や文化の面で多元的な社会である点を理解できたか。②台湾における民族や文化の状況が、島外から来た支配勢力の交替で次々と変わった点を理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①資料の精選に努め、生徒が理解しやすく興味を引くように工夫する。②日本の植民地支配をめぐり、台湾人の中に様々な意見があることを紹介する。③台湾をめぐる国際情勢には、現在も微妙な点が多いことに注意する。

3　アイルランドのジャガイモ飢饉

(1)　**教材として取り上げた理由**　　大航海時代にラテンアメリカから、ヨーロッパに伝播したジャガイモは、徐々に人々の食卓に普及していった。土地のやせたアイルランドでは、農民の重要な栄養源としてジャガイモへの依存度が高まった。19世紀のアイルランドでは、イギリス人による土地支配のもと、多くのアイルランド人は小作農として生計を立てていた。彼らの栽培する小麦は地代として納められ、地主に富をもたらしたが、アイルランド人の農民の食糧になったのはジャガイモであった。産業革命以降のイギリスでは自由主義的な改革が進行するが、この時期のアイルランドでは土地・宗教・自治をめぐ諸問題がおこり、それが現在も「アイルランド問題」として続いている。1845年からのジャガイモの凶作は大飢饉を引き起こし、土地を離れざるをえなかったアイルランド人は大量の移民となった。彼らはアメリカ等での定住化の過程で数々の困難に対処せねばならなかった。アメリカ社会におけるアイルランド系移民のあり方は、異文化の接触を考える上での様々な問題を提起している。そこで人・物の移動と文化形成を考察する教材として、「アイルランドのジャガイモ飢饉」を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は19世紀の欧米社会の成長と変容を扱う、7時間構成の第3時限目に当たる。第1時限ではウィーン体制とヨーロッパ、第2時限ではイギリスにおける諸改革と自由主義の発達、第3時限ではアイルランドのジャガイモ飢饉、第4時限では2月革命とナポレオン、第5時限ではアメリカ合衆国の発展、第6・7時限ではヨーロッパの変貌を取り上げる。学習指導要領での関連分野は「世界史A」の「(2)一体化する世界」の「ウ　ヨーロッパ・アメリカの諸革命」、「世界史B」の「(4)諸地域世界の結合と変容」の「ウ　ヨーロッパ・アメリカの変容と国民形成」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○食料としてのジャガイモの普及 ○ジャガイモのヨーロッパへの伝播	○19世紀イギリスの労働者の食生活を資料から読み取り、下層労働者の食事にジャガイモが多く取り入れられていたことを確認する。 ○ラテンアメリカからヨーロッパにジャガイモが伝播した経緯を地図で確認する。 ○なぜ都市の最下層労働者にアイルランド人が位置づけられていたのかを考える。	○麦「イギリス人の食生活」 ○地図「ジャガイモの伝播」 ○資料「1844年のイングランドにおける労働者階級の状態」
	○イギリスによるアイルランド支配	○年表から1801年にイギリスがアイルランドを併合した前後の政治的・経済的状況を知る。 ○アイルランド問題の原因である宗教的差別・土地	○年表「イギリスのアイルランド統治」

展開	○ジャガイモ飢饉の発生	問題・自治要求について、カトリック刑罰法を通して理解する。 ○飢饉の深刻さを資料から読み取り、農民が土地を離れねばならなかった理由を考える。 ○1845年からのジャガイモ飢饉が、多くの餓死者を出すとともに出稼ぎ移民の数を激増させたため、アイルランドの人口が著しく減少したことをグラフから読み取る。	○資料「カトリック刑罰法」 ○資料「ジャガイモ飢饉」 ○表「飢饉による死者数」「海外移民数」 ○グラフ「アイルランドの人口の変化」
	○アメリカへ渡ったアイルランド移民 ○定住化の中で発生する問題	○1860年のアメリカ移民の出生地の表からアイルランド出身者が一番多かったことを読み取る。 ○アメリカで定住化する中で職業上・宗教上の問題に直面していたことを資料から読み取る。 ○アイルランド系住民が奴隷制を支持したことなど、彼らの政治・宗教に関する活動を理解する。 ○移民が新しい社会に定住する過程において発生する問題について考える。	○表「アメリカ移民の出生地1860年」 ○資料「アイルランド系移民」 ○資料「奴隷解放についてのアイルランド人の発言」
まとめ	○人・物の移動が及ぼした影響	○アイルランド系移民がアメリカ社会に定着していること、アイルランドでは現在でもジャガイモ栽培が農民の生活を支えていることを理解する。 ○母国を離れても民族のアイデンティティを保とうとする移民の活動と、厳しい環境でも土地を離れずジャガイモ栽培を続ける農民の様子から、生まれた土地に対する強い思いを理解する。 ○ジャガイモの伝播がアイルランド民族に与えた影響について自分なりに考えをまとめる。	○ＶＴＲ「聖パトリック祭」「現在のアイルランド農民」 ○ワークシート

(4) **評価の観点**　①ジャガイモの伝播と凶作がアイルランドに与えた影響を理解できたか。②イギリス統治下のアイルランドが抱えていた経済・政治・宗教的問題を理解できたか。③他民族との共存を図る上で発生する問題を理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①生徒の学習意欲を高め、理解を深めるような資料を用意する。②資料を活用しやすいようにワークシートを工夫する。

4　人類史上における縄文文化の意味　――縄文人の交易（人と物の移動）――

(1)　**教材として取り上げた理由**　　従来の縄文時代観の見直しが叫ばれて久しい。特に①小規模の集落で移動型の生活（狩猟・採集生活だから）、②未開で貧しく不安定な生活、③平等な社会、といったこれまでの縄文時代に関する定説が、「縄文のタイムカプセル」と呼ばれた福井県鳥浜貝塚や青森県三内丸山遺跡等、最新の発掘調査によって一層見直しがはかられている。例えば、①周辺にも衛星的な集落を持ち、大型建造物が存在する大規模な集落、②豊かで自然生態系に即した計画的な生活、③集団のリーダーに率いられた階層社会のごとくである。今回は、新聞各紙に取り上げられた古代史関連記事を有効に活用し、ビデオ教材、実物教材によって興味関心を高め、縄文時代に関する認識を深め、縄文文化との関連が、東アジアのみならずより大きな広がりを示しつつある今日、共生の視点から、文化というものが、征服者の文化（例：キリスト教圏の拡大による在来の文化の破壊）ではなく、それぞれが独自かつ対等の価値を持ち、相互に影響を与え合うインタラティブな関係であることを縄文文化を例に理解できるような教材作りを目指してゆきたい。

(2)　**本時のねらい**　　本時は、縄文文化に関する授業の第３時限に当たる。年代的には、縄文時代の約11000年間のうち、主に縄文早期末（約6300年前）～後期末（約3000年前）までを取扱い、必要に応じて後期旧石器文化、縄文草創期や晩期の文化、弥生文化との関連を説明する。なお、第１時限は、「縄文文化の始まり」とし、旧石器時代から縄文草創期への移行、南九州の縄文文化の先進性と東漸、定住革命（植物食への依存・土器の発明等）、第２時限では、「新しい縄文観に基づく縄文時代の生活」とし、具体的には、①道具（土器・石器・骨格器等）、②食物（狩猟採集に加え畑作・栽培技術について）、③服飾（耳せん・櫛・かんざし等）を取り上げる。また、ここで全員に調べ学習の課題（ワークシート）を与える。第４時限は、縄文人の精神世界、「自然生態系との調和」、「人類史上における縄文文化の位置と意味」を扱う。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○縄文社会の豊かさ	三内丸山等の発掘により縄文社会は物資が豊かだったこと再び想起する。何故かを考える。	パネル「三内丸山」 VTR：「縄文のタイムカプセル」
	○交易の存在	○単なる自給自足ではなく、交易を行っていたことに気付く。 青森・三内丸山（前・中期）や礼文島の船泊遺跡（後期）も交易を示す遺跡であることを学習する。	VTR：「万物創世記」 VTR：「堂々日本史」
	○交易品の具	○交易品の具体例を順に示し、伝播・交易ルート	生徒のワークシート

展 開	体例 ○古代の航海	を確認する。 実用品として黒曜石やアスファルトがあるが、産地はどこで（白滝・神津島、昭和町等）、どこまで分布し、どのように使われたか、また、移動開始はいつ頃か（ミロス島と比較）を考察する。 土器についても黒曜石と同様、朝鮮半島やシベリアとの交流の存在に気付く。海産物についても内陸遺跡の多数の海水魚骨から交易とそれを支えた保存食の存在（塩漬け・干し魚・薫製）に気付く。 ○宗教的装飾品の種類や意味について話し合う。 コハクやヒスイの産地（久慈・銚子・糸魚川など）、分布範囲、移動開始時期を把握し、どのように使われたか、を考察する。さらに、ヒスイについては、中国の「玉」や古代マヤの例と比較して、硬玉（ジェダイト・ジェート）と軟玉（ネフライト）との違いを学び、硬度（７）の硬玉の加工から祭祀の重要性とそれに伴う階層社会の存在を理解し、縄文人の精神世界の一端に触れる。 貝製品についても産地（南島・伊豆七島など）分布・用途について考察する。 ○縄文遺跡からの丸木舟や櫂の出土例から、縄文人の航海について話し合い、理解を深める。	黒曜石実物各種 新聞記事・参考書・東アジア地 グラフ写真 最近の新聞記事 写真（ヒスイ・コハク） 日本のヒスイと中国玉のグラフ写真 ネフライトの勾 具のグラフ写真 VTR：「サイエンスアイ」 写真（丸木舟）
まとめ	○縄文時代における文化交流	○縄文時代の交易が比較的広範囲であったこと、また、陸路だけでなく、海路（含む河川）もあった可能性を理解する。 ○人・物の移動には必然性がともなうこと（生活の豊かさ・宗教的理由・自然災害等）を理解し、次の授業と関連して、考えてくる。	

⑷ **評価の観点**　①縄文時代について、想像以上に活動範囲・交易範囲がひろかったことに気づけたか。②必要に応じ、人類史の大きな流れと対応して理解が深められたか。

⑸ **指導上の留意点**　生徒が調べてきた交易品の具体例に対して事前・事後指導を徹底し、精選したものを本時で効果的に取り上げ、かつ評価し、生徒の学習意欲を喚起できるよう配慮する。

Ⅱ　日本と諸外国との接触から派生してきた問題

1　沖縄の歩みと諸外国との関係

(1)　**教材として取り上げた理由**　　琉球・沖縄の歴史について、教科書の扱いは非常に少ない。また、生徒に尋ねても、ほとんどの生徒は「琉球王国」の存在を知らない。中世において琉球では、尚巴志が三山を統一した数代後に王の尚真があらわれ、中継貿易以外にさまざまな施策をおこなったことや、琉球処分後に沖縄の人々の知らないところで、清との間で先島分島案の話が進められていたことなど、琉球・沖縄について知らないことが多いのではないだろうか。ここでは、沖縄の近現代史については触れないが、いずれは生徒自らが課題として学習していくための布石にしたい。今回は、琉球・沖縄の歴史の中で、一時代を築いた琉球王国の歴史に目を向けることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、貿易の開始の背景・形式・経過・推移といった日明貿易の展開と、倭寇の活動、日朝貿易を中心とした日朝関係の推移について扱う。本時では、日明貿易をはるかに上回る頻度で明と琉球との間で貿易が行われ、南方との中継貿易とあわせて琉球王国に繁栄をもたらしたことや、その後の明の海禁政策の破綻による中国商人の南海進出や、ポルトガル人の東洋進出等により、アジア諸国間の貿易に占めていた琉球の役割や地位が低下していったことにも目を向けさせる。また、それ以前に琉球が本土の歴史からはなれて、小国の分立から統一国家の形成に向かっていく過程も理解させる。学習指導要領の関連分野では、「日本史Ｂ」の「(3)中世の社会・文化と東アジア」の「イ　武家政権の展開と社会の変化」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○沖縄米軍基地に眠る遺跡	○数年前におこった沖縄米軍基地の強制使用をめぐる問題から、基地内にある各時代の遺跡の保存状態に目が向けられるようになったことを知る。 ○基地と重なっている重要な遺跡にどのようなものがあるかを知る。	・新聞記事
展開	○古代の琉球 ○中世琉球の政治・社会	○古代の琉球にも日本の縄文文化にあたる時期が存在したことを思い出す。 ○旧石器時代に続いて、縄文土器や弥生土器の使用を含む貝塚時代が長く続いたことを思い出す。 ○貝塚時代に続くグスク時代の特徴を理解する。 ○三山鼎立の時代から、琉球王国が誕生するまでの流れや、当時の日本との関係を理解する。	・ワークシート ・資料「沖縄県と日本本土の歴史の比較」 ・史料「南聘紀考」「羅山文集」「島津國史」

展開	○中継貿易	○琉球王国時代に尚真によって武器追放令が出されたことやこの法令の内容を理解する。 ○このことが、後世の琉球の人々にどのような影響を与えたのかを考える。 ○何が琉球王国の経済的基盤になったのかを考える。 ○琉球王国の位置を地図で確認し、貿易に力を入れるようになったことを理解する。 ○明の冊封体制とは何であったか、その特徴を思い出す。 ○明が海禁政策をとった理由を考える。 ○明の海禁政策が琉球に何をもたらしたかについて考える。 ○自分が琉球王国の王であれば、どのような貿易を行えば、利益を増やすことができるかを考えて発表する。 ○琉球の中継貿易の特徴を理解する。 ○中継貿易による琉球王国の繁栄の様子を、資料を見ながら想像する。 ○琉球の貿易が衰退していった理由を考える。	・史料「百浦添欄干之銘」「中山世譜」 ・資料「沖縄の宗教と社会構造」「南島の風土と歴史」抜粋 ・地図 ・資料「琉球王国交易ルート」 ・資料「明に進貢した国々の回数」 ・資料「中継貿易の貿易品」 ・史料「首里城正殿鐘銘」資料「琉球貿易図屏風」「進貢船」 ・資料「倭寇の回数」
まとめ	○琉球の歴史の理解	○琉球の歩んできた歴史を学び、本土とは異なる政治や文化が展開してきたことを理解する。 ○中継貿易が中世琉球の繁栄の源になったことを理解する。	

(4) **評価の観点**　①古代からの琉球・沖縄の人々が歩んできた歴史を理解できたか。②琉球では日本本土とは異なる政治や文化が展開していったことを理解できたか。③琉球王国がどのような方策をとって繁栄したかを把握することができたか。

(5) **指導上の留意点**　①島津氏の琉球入り以降の沖縄の歴史については、この時間では扱わない。②難解な史料については、現代語訳を用意し、生徒が理解しやすいように留意する。③板書する際には、地名・人名にはなるべく仮名をふる。

2　日本産の銅が清国に与えた影響

(1)　**教材として取り上げた理由**　いまでも「江戸時代は、国を閉ざして外国との交際を絶った閉鎖的な時代である」と思いこんでいる生徒が少なくない。しかし、実際には、オランダ・清国・朝鮮とは江戸時代を通じて貿易を継続している。そして、その交易は東アジアのみならず、東南アジアやヨーロッパにまで少なからず影響を及ぼしているのである。なかでも交易によって清国へ流入した日本産の銅は、中国経済に多大な影響を与えた。日本から清国へ流れた大量の銅は銅銭の原料となったが、17世紀後半から18世紀前半にかけて、鋳銭原料全体の6割から8割を占めたのである。これは驚くべき数値であり、日本の銅なしには中国の貨幣制度の維持が困難であったことを示している。また、アジア諸国は清国の冊封をうけ、同国を中心とする密接な経済圏をつくっており、そこで流通する貨幣は清国産の銀貨や銅銭が過半であった。こうした日本産の銅が清国に与えた影響を考察させることで、江戸時代の日本が中国経済、ひいてはアジア経済と強く結びついていたという事実を生徒に理解させることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　本時は4時間目構成の第3時間目に当たる。第1時間目では、鎖国以前における朱印船貿易の実態について、第2時間目では鎖国以後の貿易とその変遷を長崎貿易を中心に概観する。本時では、日本の主たる輸出品であった銅の清国への流入とその影響について考察させ、鎖国体制下にあっても我が国がアジア経済と密接につながっていたことを理解させる。第4時間目では、交易によって国内に入ってきた物と人が、どのような影響を我が国に及ぼしたかということを取り上げる。学習指導要領の関連分野は「日本史B」の「(4)近世の社会・文化と国際関係」の「ア　織豊政権と幕藩体制の形成」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○アンケート結果 ○海舶互市新例の信牌制度 ○信牌に対する清国政府の反応	○江戸時代の鎖国制度・貿易などに関するアンケート結果をみて、自分たちの時代認識を把握する。 ○1715年の海舶互市新例は、金・銀・銅の流失を危惧した新井白石の貿易制限令であり、貿易額と船数が大幅に削減され、とくに清国については幕府が付与した信牌（貿易許可証）を所持する唐船（清国船）しか貿易が許されなくなったことを理解する。 ○日本の年号が記された信牌の所持は、「貿易商人の幕府への臣従を意味する」と疑った清国政府が、貿易商人から信牌を没収し、その結果、日本との貿易が中断されていまう事実を知る。	資料「アンケート集計表」 写真「日本が清国の貿易商船に与えた信牌」
	○康熙帝の貿易継続決断	○その後、清国政府は信牌制度をめぐって朝議を繰り返し、最終的に康熙帝が貿易続行の決断をくだし	写真「康熙帝」

展開	○日本産の銅の清国への輸出について ○日本産銅の輸出ルート	て貿易商人に信牌を返却した経緯を学ぶ。 ○清国が華夷秩序に抵触する信牌制度を黙認してまで貿易を継続したのは、銅銭原料を日本に依存していたからだという事実を理解する。 ○海舶互市新例以前、清国が多量の銅を日本から輸入している現実を、貿易量変遷の数値をグラフ化することによって把握する。 ○長崎からどのようにして清国へ銅がもたらされたかというルートや方法を学ぶ。 ○薩摩藩が日本国内で銅を集めて琉球王国へおくり、それらが朝貢貿易によって琉球から中国側へ多量に流入していた事実を知る。 ○日本産の銅が、世界各地へ輸出され、貨幣や日用品などの原料として重宝されていた事実を図解によって把握し、清国だけに銅がもたらされていたわけではないことを改めて認識する。	図表「銅輸出額」 遺物「寛永通宝」 地図「唐船のおもなルート」 絵画「蘭館絵巻倉前図」 地図「琉球使節の進貢ルート」 図解「日本産の銅の世界への輸出径路」
まとめ	○アジア諸国に与えた日本産の銅の影響 ○中世日本の貨幣制度を維持した中国銭 ○日本とアジア経済の密接なつながり	○清国へ流入した日本産の銅が、清国のみならず同国に冊封されていたアジア諸国に経済的な影響を与えたことを学ぶ。 ○中世においては、逆に日本が中国から多量の銅銭を輸入し、貨幣制度を維持していたことを把握する。 ○古来より日本は交易を通して中国をはじめとするアジア諸国と密接につながっており、それは鎖国体制下においても不変であることを認識する。 ○どのような時代や状況下においても、我が国がアジア世界と隔絶して存在し得ないことを理解する。	

(4) **評価の観点**　①海舶互市新例の日本側の意図と内容が正確に把握できたか。②清国が華夷秩序に抵触することを黙認してまで対日貿易にこだわった理由が正しく理解できたか。③鎖国体制下の日本が清国・アジア経済に大きな影響を与えていたことがしっかりと認識できたか。③いつの時代、場所においても、国家や人間が国際社会と全く隔絶して存在し得ないということを考えさせる場となり得たか。

(5) **指導上の留意点**　①『アンケート結果』・『信牌』・『オランダ商館での銅取引』・『寛永通宝』など、資料や史料を効果的なタイミングで使用し、生徒の興味関心を高める。②日本産の銅の輸出ルートに関しては、一目で流れがわかる自作の図解を見せ、生徒の理解を助けるようにする。③日本と中国の経済的なつながり（とくに貨幣制度）については、中世に関しても簡単に触れ、縦の歴史の流れを生徒が把握できるように配慮する。

3　欧米列強のアジア進出と早期開国の可能性

(1)　**教材として取り上げた理由**　いわゆる「鎖国」とは、キリスト教禁教の徹底を主旨として、貿易の統制すなわち外国船の来航制限と日本人の渡航及び帰国禁止をはかったものである。以降、幕府外交の基本方針として、200年以上にわたり海外からの通商要求を拒絶し続けている。その「鎖国」は1853（嘉永６）年のペリー来航を契機として終焉を迎えるとされている。では、それ以前に開国の可能性はなかったのであろうか？　ここではペリー以前の欧米列強のアジア進出、とりわけロシアの極東進出から対日通商要求への流れを通して、この時期に蝦夷地調査とそれに伴う領域の確定、開発計画・防備論などの策定が行われ、外交政策の揺れ、すなわち部分的開国の可能性と「鎖国」堅持の衝突があったことを考察させていく。その後のイギリスの対アジア強硬路線（アヘン戦争・アロー号事件）や「砲艦外交」ともいえるペリーの開国要求との対比から、近代国家としての外交の在り方や領域国家としての認識の芽生えを通して、国民としての自覚と国際社会において自ら考え判断する力を培うことをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　本時は、２時間連続の選択講座「日本近現代史」の導入テーマとしての３回（６時間）構成の第１・２時限にあたる。本回では、ペリーの開国要求が成功したのは何故かを問い掛けながら、それ以前の開国の可能性について考えさせる。ロシアの極東進出と幕府の対応、蝦夷地探検を踏まえて変化していった日本の領土・国境への認識、更にイギリスの対アジア戦略を含めての外交方針の変遷をみていくものである。第２回ではシーボルト等による日本人分析を基にしたペリーの開国戦略と日米和親条約の締結から将軍継嗣問題と外交方針をめぐる南紀派と一橋派の確執を、第３回の授業では日米修好通商条約の締結と貿易への影響、及び不平等条約の改正に半世紀以上の時間を要した点を扱う。学習指導要領の関連分野は「日本史Ａ」の「(2)近代日本の形成と19世紀の世界」の「ア　国際環境の変化と幕藩体制の動揺」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○ペリー来航による開国 ○開国要求成就の理由	○開国の契機がペリーの来航及びその交渉であったことを確認する。 ○ペリーの開国要求が奏功したのは何故だったのかを話し合う。 ○ペリーが自らを殊更に権威づけたり、指揮下の艦隊に江戸湾内での示威行為を命じている点から、現在の日本の外交姿勢との比較を行う。 ○ペリーの来航以前に開国の可能性がなかったのかを検討する。	資料「ペリー艦隊図」「狂歌」 地図「江戸湾内でのペリー艦隊行動図」
	○欧米のアジア進出	○イギリスに代表される欧米列強の極東進出と方向性を異にし、ロシアの対日通商要求が毛皮採取業者	地図「18世紀の世界の状況」

展開		の生活必需品入手という必然性からであった点を地図を基に理解を深める。	
	○国内の対ロシア観	○「赤蝦夷風説考」に見られる対ロシア交易論とそれに基づく田沼意次の蝦夷地開発計画、及びその前提としての蝦夷地調査について理解する。	史料「赤蝦夷風説考」
	○ラクスマンの根室来航	○漂流民大黒屋光太夫送還を名目として根室に来航したラクスマンに対して、信牌（長崎入港許可証）を授与するなど松平定信ほか幕閣内部に部分的開国（消極的開国策）を是とする判断があった点を理解する。	史料「通航一覧」
	○領土及び国境認識の確立	○蝦夷地調査の過程で、領土・国境に対する認識が確立していった点について、白地図を基に作業し、話し合う。	板書「大日本恵登呂府」　白地図「千島・蝦夷図」
	○レザノフの長崎来航及び丁卯事変	○ラクスマンに与えた信牌を持ち通商を要求したレザノフ来航に際し、幕府は鎖国を「祖法」であると主張して開国・通商を拒否している。ラクスマン来航時との幕府方針の大きな転換に触れ、レザノフは皇帝の許可を経ることなく樺太・択捉への報復攻撃（丁卯事変）を命じている。この経過に対して幕府の方針を批判した元老中松平定信や松前奉行をも含め、三者それぞれの対応から、外交の在り方について話し合う。	史料「通行一覧」 史料「蝦夷地一件意見書草案」
	○ゴロヴニン事件	○ゴロヴニン及び高田屋嘉兵衛の捕縛と交換交渉、丁卯事変の謝罪を以ての和解の経過を理解すると共に、この際に定めた国境を白地図上で確認する。	白地図「千島・蝦夷図」
まとめ	○イギリスの極東進出	○フェートン号事件以降、アヘン戦争に至るイギリスの行動と幕府の対外方針の変遷を通して、国防の必要性を認識しながらも、一貫性を欠く外交施策を繰り返しつつ、ペリー来航を迎えた事を確認する。	史料「異国船打払令」「薪水給与令」

(4) **評価の観点**　①日本の外交や領土・国境に対する認識が対ロ交渉を通して変化していった点を理解できたか。②「鎖国」について史料を基にした理解ができたか。③外交交渉とは自己と他者がいて成り立つものであるとの認識、及び外圧への対応という点で現在の外交に引きつけた分析・判断ができているか。

(5) **指導上の留意点**　①史料については、原文だけではなく読み下し文と現代語訳を用意して生徒の理解を図る。②日露国境の歴史的経緯について正しい理解ができるように留意する。

4　統一に向けたヴェトナムの独立運動と日本

(1)　**教材として取り上げた理由**　　冷戦が終りを告げた今、中国、旧ソ連など社会主義の旗を掲げていた国々が新たな改革を模索している。ヴェトナムもまた、1986年よりドイモイ（刷新）政策に着手し、ＡＳＥＡＮ加盟やアメリカとの国交正常化を果たすなど目覚ましい経済発展と新たな外交を展開している。しかしながら、ここに至る道は決して平坦なものではなく、近現代のヴェトナム史は様々な思惑を持った他国によ支配からの解放の歴史でもあった。特に、直接権益を持たないアメリカが「ドミノ理論」を掲げて介入したヴェトナム戦争は、戦後最も長期化した局地戦である。この戦争でのアメリカの初めての敗北は、アメリカ人自身にヴェトナム症候群（ヴェトナムシンドローム）といわれた大きな傷を負わせたばかりか、それまでの冷戦構造を含めた世界情勢に大きな影響を与えることになった。また、ヴェトナムにおいても、戦争の勝利による国家の統一と社会主義政策の推進がドイモイ政策につながるなど、ヴェトナム戦争が大きな転換点になっている。一方、近年のヴェトナムと日本は、19世紀の東遊（ドンズー）運動、20世紀半ばの帝国主義による植民地支配、日本経済を押し上げる役割を担ったヴェトナム戦争による経済特需や現在の活発な貿易関係など深く関わり続けている。ここでは、世界史の大きな転換点となったヴェトナム戦争を中心に、20世紀に繰り広げられたヴェトナムの統一運動を取り上げ、日本を含めた戦後世界がどのように形成されてきたかを理解させることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は４時間構成の３時限目に当たる。１時限目は、第２次世界大戦後の米・ソの対立がどう形成され、ヨーロッパにおいてどのような影響を与えたかについて。２時限目は、中華人民共和国の成立と朝鮮戦争について扱う。３時限目では、特にヴェトナム戦争を中心に、20世紀に行われた南北ヴェトナムの統一運動を取り上げ、日本との関わりを意識しながら戦争の惨禍と戦争が各当事国に与えた影響について考察させる。４時限目では、第三世界の動向について概観する。学習指導要領の関連分野は、「世界史Ｂの(5)の地球世界の形成のイの米・ソ冷戦と第３勢力」の項である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○ヴェトナムに対するイメージの紹介	○前時の終りに書いた「ヴェトナムについて知っていること、感じていること」というアンケートのまとめを読んで、各自が抱いているヴェトナムのイメージについて知る。	○生徒のアンケートのまとめ
	○戦争の惨禍の実態	○「ベトちゃん・ドクちゃん」など、戦争によって被害を受けた子どもたちのＯＨＰを見て、何が起きたのか、なぜこのようになったのかを考える。	「戦場の枯れ葉剤」「母は枯れ葉剤を浴びた」
展開	○復習事項の確認 ①フランス統治時代	（４）の諸地域世界の統合のオの帝国主義と世界の変容の項で学習した以下の事項を再度確認する。 ○ヴェトナムを含む東部インドシナは19世紀後半から、インドシナ連邦としてフランスの植民地であっ	○世界地図掛け図「世界の教科書」（ヴェトナム編）

		たこと。	
	②東遊運動の展開	○ファン・ボイ・チャウによって、日露戦争の勝利者であった日本への留学を奨励するという東遊（ドンズー）運動が行われたが、フランスと協約を結んだ日本は留学生の独立運動を弾圧したこと。	
	○日本統治時代	○1941年に日本がヴェトナムを占領し、1945年３月の日本軍のクーデターによって、フランス軍が武装解除されるまではフランスとの二重支配を、それ以降、1945年８月までは単独での支配を行い、ヴェトナム人に深い苦しみを味あわせたこと、特に、日本とフランスによる強制的な米の買い付けによって、多くの人々が亡くなった事実を認識する。	「ヴェトナム200万人餓死の記録」 ○ヴェトナム略史年表
	○インドシナ戦争	○1945年９月ヴェトナム民主共和国の独立宣言に対して、ヴェトナムの再支配を継続しようとしたフランスの侵略が契機となって起こったインドシナ戦争とヴェトナムが分割された経緯について学習する。	○ヴェトナムを取り巻く諸外国の相関図 「写真が語る20世紀」
	○アメリカの介入	○「ドミノ理論」を掲げたアメリカが、どのようにヴェトナム戦争に介入し、戦火を拡大していったかについて学習する。	「戦争と平和」 「ヴェトナム戦争の記録」
	○ヴェトナム戦争の実態	○第二次世界大戦を遥かに凌駕する爆薬が投入されたというヴェトナム戦争の実態を、参戦国、兵力、爆弾の投下量、被害者数、枯れ葉剤の散布などの項目について学習し、その被害の甚大さを認識する。	「新聞集成」 「歴史としてのヴェトナム戦争」
	○ヴェトナム戦争の影響	①ヴェトナムが、戦争の惨禍を乗り越えて、どのように発展してきたか。②アメリカの負ったヴェトナム症候群（ヴェトナムシンドローム）③基地問題やヴェトナム経済特需など当時の日本とヴェトナム戦争との関わり、について学習する。	「ヴェトナム戦争神経症」 「統計年鑑」
まとめ	○平和な社会を築くために	○ヴェトナム人、アメリカ人、日本人という立場を意識しながら、ヴェトナム戦争についての感想を書く。また、国際社会を構成する国家の一員として、ヴェトナム戦争に限らず、「戦争」を防止することが重要な課題であることを再認識する。	

(4) **評価の観点**　①ヴェトナムの独立・統一運動を阻害した原因の１つが大国の思惑にあったことが理解できたか。②戦争の惨禍を十分に理解できたか。③戦争に直接参戦していなくても、何らかの形で関わっている場合もあるということを認識できたか。

(5) **指導の留意点**　①戦争の惨状については、ＯＨＰ、表、資料などを使用し、より具体的に理解できるようにする。②国際社会に生きる一員として、戦争防止が地球世界の課題であることを深く認識させるよう留意する。

Ⅲ　日々の生活の場から歴史をみつめる

1　和風住宅の源流をさぐる

(1)　**教材として取り上げた理由**　　日本の住宅建築様式として、寝殿造と書院造が広く知られている。前者は公家の住宅様式として平安時代に成立し、後者は武家の住宅様式として室町時代後期（あるいは安土桃山時代）に成立したといわれている。現在の我々の生活に直接的な影響を与えているのはまぎれもなく後者、つまり書院造であり、その残照を現代の日本住宅の中に数多くみることができる。明治以降の近代化の過程で、住環境においても「洋風＝近代的＝脱封建的＝文化的」という概念が広がり現在に至っており、椅子やベッドを活用する「洋間」が住宅の中心になってきている。しかし、一戸建て住宅だけに限らず、マンションのような集合住宅においても、外観や室内空間の一部分に和風を取り入れることが多い。また日常生活でも、当たり前のように玄関で下足を脱ぎ、座敷や床に足をのばしてくつろぐように過ごすことが多く、和風の住空間に慣れ親しんでいる、といえる。その「和風」の原型は、室町時代後期の東山文化期の書院造に求めることができる。また、住宅様式の書院造に限らず、現在「日本的」とされるものの多くはこの東山文化期に源を発しているものが多い。その意味で、現在のわれわれの生活は東山文化の影響下に今もってある、といえる。そこで、今日の住宅・生活に多大な影響を与えた東山文化・書院造を学ぶことにより、日本の文化の特色を把握し、日本に住む人々の生活様式を探究するきっかけを生徒自身につかませることを目的として本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は２時間構成の２時限に当たる。第１時限では、日本住宅の変遷を取り上げる。本時では、和風住宅の源流である書院造の特性を把握することで、東山文化全体の特徴を理解させる。住宅様式そのものだけに焦点をあてるのではなく、絵画や華道などとの関連、現代の生活に結びついていることにもふれ、東山文化が現代生活へ与えた影響の大きさにも気づかせる。学習指導要領での関連分野は、「日本史Ａ」の「(1)歴史と生活」の「ア　衣食住の変化」、「日本史Ｂ」の「(3)中世の社会・文化と東アジア」の「イ　武家政権の展開と社会の変化」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○現代の和風住宅について	○事前に調べてきている自宅の間取り図と、資料①・②とを参考にして、現在居住している空間の「和風」・「和室」がどのようなものなのかを考察し、記録する。	資料①「現代の住宅」 資料②「不動産広告」
	○書院造について	○住宅建築の流れの中で、書院造の位置づけを復習する。 ○書院造の特色について理解する。 資料③の慈照寺東求堂同仁斎をモデルに書院造の構	前回のワークシート ＶＴＲ『禅林と会所』

展 開		成要素を把握する。現代の和室の原型であることに気づく。 ○和室を構成する建築用材の中で、日頃からなじんでいる畳に焦点をあて、畳が敷き詰められてきた流れを資料④をもとに読みとる。 東三条殿→『蒙古襲来絵巻』→慈照寺東求堂同仁斎 また、畳のもつ役割の違いにも注目する。 ○和室の格式を表現する存在となった床の間（押板）が成立してきた流れを資料⑤から読みとる。 『春日権現験記絵』→『慕帰絵』→園城寺光浄院→現代の和室のイメージ ○禅宗寺院から影響を受けたことを、「玄関」・「付書院」を例にとり理解する。	資料③「慈照寺東求堂同仁斎」 資料④「畳」 資料⑤「床の間」 資料⑥「禅宗寺院」
	○室内装飾の発達について ○東山文化の特色について	○資料⑤・⑦をもとに、絵画・書跡・生花が座敷飾りとして重要視され、発達していくことを理解する。茶道の発達との関係にも注目する。 ○上記の室内空間の発達の特徴を通して、東山文化の全体の特色をまとめる。 ○ワークシートに代表的な作品などを記入する。 ○現在にもその影響が残っているものを考える。 ○文化が庶民化していくことにも注意する。	資料⑦「座敷飾り」 ワークシート
まとめ	○和風住宅の流れ	○その後の住宅の変化を追い、現在の住宅様式が形成されていくことを理解する。 ○現代の住宅建築にも地域差があり、民家とよばれる近世以降の住宅の地域差とのつながりに注意する。	資料① 資料⑧「民家・住宅の地域ごとの特色」

(4) **評価の観点**　①書院造について理解できたか。②書院造の成立に伴い、その室内装飾をになう芸術が発達したことを理解できたか。③現代の和風建築が書院造の影響を受けていることが理解できたか。④東山文化の特色を理解できたか。⑤住宅の様式に地域差があることを理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①写真パネル・資料プリント・ＶＴＲなどの視覚的資料を活用し、住空間をできるだけ具体的にとらえられるように配慮する。②住空間の変遷を理解させる場合は、必ずその過程が分かるような絵画・写真資料を活用する。③東山文化についてはワークシートを用い、その特徴を整理する。④気候条件が異なる地域にまたがって日本という領域があるので、住宅様式は生活環境に応じた地域差があることを念頭におく。⑤住空間は、立地条件や経済上の制約を受けやすいものであることを十分に認識して、現在の住宅を取り扱う。

2　河川と共に育んできた地域の生活と文化　――多摩川流域を素材として――

(1)　**教材として取り上げた理由**　人間生活の営みにおいて、河川は古くから重要な役割を果たしてきた。河川と人間の関係のあり方は、地域の社会的条件などにより様々で、歴史的変遷もそれぞれ異なる。だが、いつ、いかなる地域でも、河川と人間社会は共存してきた。時には人間が用水や治水、あるいは流通といった側面で河川に働きかけ、ある時には開発で河川の様相に変化を生じさせつつも、一度たりとも両者の関係は断絶せず続いてきたといえる。

ここでは東京西部を貫流する多摩川を事例に、流域の生活や文化を歴史的に考察する。これにより、これからの社会生活においても、人間と自然環境の調和がいかに大切なことかを再確認することを喚起したい。また、その際、地域に残る絵画資料や地誌類・景観・地名などを積極的に活用することで、生徒が文化財保護や環境保全を自ら考える姿勢を培うことにも効果的であると考え、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　本時は3時間構成の2時限にあたる。第1時限では、前近代における多摩川流域の地域的特質を概観し、現在の日常生活で顧みることが少なくなった河川と人間の関係の見直しを図る必要性を促す。本時では、近世の地域社会と多摩川の関係を取り上げる。近世には、全国的に多くの地誌類や河川絵図が描かれたことから、如何に河川と人々の生活が密着していたかに注目させる。特に『調布玉川惣畫圖』をテキストに用い、その主題や描かれた景観などを読み解く作業的学習を通じ、近世の多摩川流域に暮らした人々の生活やそこに育まれた文化など、自然と人間の調和の痕跡を考察させる。第3時限では、近現代の多摩川流域の変質に関し、砂利採掘など産業開発の歴史に触れる。さらに近年特に盛んな環境保全の取組みやアメニティ空間としての水辺の環境を考察し、人間からの河川への働きかけや影響を確認し、河川と人間の共生の重要性を理解させたい。学習指導要領での関連分野は、「日本史A」の「(1)歴史と生活」の「オ　地域社会の変化」、「日本史B」の「(1)歴史の考察」の「ア　歴史と資料」・「ウ　地域社会の歴史と文化」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○近世の多摩川に対する認識を探る。	○江戸時代に描かれた絵画資料から、多摩川流域の地理的・歴史的概略を再確認する。 ○江戸時代に多くの河川絵図が作成された理由と、その意味を考える。	資料 「多摩川流域の絵画資料」 「主要河川絵図一覧」
	○近世の代表的官撰地誌である『新編武蔵風土記稿』及び『江戸名	○3つの地誌の資料としての性格を知る。それにより、それらに記載されていることが、当時の武蔵国内における地域社会に対する共通認識であることを確認する。 ○題材として描かれている多摩川の景観や産業など	資料 『新編武蔵風土記稿』・『江戸名所図会』・『武蔵名勝図会』

展 開	所図会』・『武蔵名勝図会』に取り上げられている多摩川に触れる。 ○『調布玉川惣畫圖』を読み解く。	から、かつての多摩川流域の生活や文化を探り、次の点に着目する。 ①景勝地としての多摩川流域⇒流域の諸寺社・小金井の桜（玉川上水）・清涼台・天守台など。 ②江戸の後背地としての多摩川流域⇒木材（青梅材の筏流し）・石灰・鮎漁・など。 ○幾つかのグループに分かれて、上・中・下流域毎などの区分で絵図を読み解く。 ○グループ毎に絵図に描かれている内容と、この絵図が作成された理由について考えたことを発表し、以下の点に着目する。 ①ランドマークとしての名所・旧跡・景観 ②流域を一つの地域的まとまりとしてとらえて作成されたこと。 ○絵図の序文を読み、作成の意図を確認する。 ⇒多摩川の水源探索 ⇒地域の歴史・文化財の掘り起こし ○絵図に描かれた景観が近代以降どう変容していったか、予想する。	 資料 『調布玉川惣畫圖』 『多摩市史』 ワークシート 史料「絵図序文」 統計資料 「砂利生産・輸送について」
ま と め	○多摩川が当時の人々にとってどのような存在であったのか、確認する。	○多摩川流域の名所・景勝地・物産などが地域を誇る文化財として認識され、地域の歴史として記録され始めたことを理解する。 ○絵図そのものの芸術性にも着目し、地域文化の進展を理解する。	統計資料 「多摩地域の国及び都指定文化財について」 史料『調布日記』

(4) **評価の観点**　①絵画資料を主体的に読み解くことで、近世の多摩川流域の生活や文化の様相を理解し、また製作者の作成目的や主題を認識することができたか。②絵画資料に描かれたランドマークや景観・地名を通し、地域社会の文化財保護や景観保全などの大切さを自覚することができたか。③地域の歴史や文化に親しむ意義や楽しさを喚起できたか。

(5) **指導上の留意点**　①膨大な情報量を有する絵画を教材として効果的に利用するため、内容の精選や取り扱い上の工夫を徹底する。②作業的・体験的な学習が実践できるよう、授業中の工夫や課題の設定を図る。③日本史学習の導入的な要素の強い授業なので、微細な知識などには立ち入らず、また専門的な用語の使用にも留意する。

3　旧東海道沿いに見る民間信仰

(1)　**教材として取り上げた理由**　　この指導案で取り上げる地域は、国道１号線（旧東海道）沿いの臨海地域にあたる。この地域は、近世には主要な街道沿いという交通面での発展に加えて、漁業や海苔養殖を地場産業とし江戸という大消費地を控えて経済的にも栄えた。また、農村地帯ではあったが、江戸近郊ということで江戸という大都市の流行の影響も受けやすかった。こうした背景の下に、この地域には近世に多様な民間信仰が展開し、都市化した今も、多くの文化財が残されている。旧東海道沿いの地域は、この地域に住む多くの生徒にとって共通したイメージを持ちやすい地域であり、この地域の中から主題を設定して学習を展開することは、この地域の生徒の歴史への関心を高め、主体的に歴史的な見方や考え方を身につけようとする姿勢をはぐくめると考えた。特定の地域を取り上げてはいるが、この基本的な考え方や方法は、他の地域の学校であってもそれぞれの実状にあわせ応用していけると考える。

(2)　**本時のねらい**　　本時は３時間構成の第３時限にあたる。第１時限では、東海道沿いの数多い神社を導入にして信仰対象となる神仏の多様さについて理解するところから始めて、祖霊神・鎮守神・御霊信仰・神仏習合など、古代から中世にかけての信仰の日本的な特色を理解する。第２時限では、近代以前に一般的だった村落における民間信仰と、開帳・霊地巡拝・代参講・流行神（はやりがみ）などの近世の江戸という都市で発展した民間信仰の特色を考える。本時の内容は学習指導要領では、日本史Ａの「(1)歴史と生活」の「ウ　現代に残る風習と民間信仰」で扱う。具体的には、地域社会に残る民間信仰に関わる文化財が本来どのような意味を持ち、それがどのように今に伝わり、現在人々にどのような形で受容されているのかを地域の文化や歴史と関連づけて考察させ、日本人の精神生活の推移について理解する手掛かりとする。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	生徒による発表	○事前に課題として与えられた文化財調査を発表する。（調査対象は、地域に残る富士塚・庚申塔など近世の民間信仰に関する文化財の中から、数時限前に自分たちで選んである。報告書は教員が様式をつくったものを配布してある。） ○報告の内容から、２時限目の内容をふまえて、近世以降、様々な信仰が流行し、地域に根付いていたことを実感する。	資料「生徒の報告書」
	失われつつある講の現状	○近世に流行した多くの講が近代以降、消滅している或いは消滅しつつあることを教員の説明から理解する。	資料「大田区内の念仏講の現状」
	地域の人々に	○現代に残る信仰の最もポピュラーな形として、自	ＶＴＲ「大森神社

展 開	今も守られている信仰：祭礼 祭礼・芸能の本来の意味 現代人の心に残る信仰の形	分たちの地元にある祭りがあげられることを知る。また、学校の地元の祭礼のＶＴＲの様子から、地域の人々が協力して地域の祭礼が行われていることを読みとる。 ○大森・厳正寺の水止舞（雨乞いに関連する獅子舞）を例に祭礼・芸能が本来共同体の秩序を維持するために、共同体の祈願を行うもの、神意を聞くものであったことを理解する。 ○先ほどの美原地区の祭りのＶＴＲに関する教員の説明によって、①他地域の人も御輿をかついでいる、②見物人が多い、といったことを知り、共同体以外の人間が祭りに関わっていることを知る。そして、祭りが共同体だけのものでなくなっていった現象は、近世から始まる都市型の祭礼の特色の一つであり、現代では一般的な現象であることを理解する。 ○民間信仰への関心が薄れた現代でも、神仏への祈りの心性が私たちにもあることに気づく。（例：①合格祈願などの願掛け、②正月の初詣） ○ただし、現代人の祈祷は、近代以前にはふつうだった村落の祭礼のような共同体の祈願ではなく、個人の利益を求めるものであることに気づく。	の祭礼の様子」 資料「大森に残る水止舞」
まとめ	近世の江戸という地域で始まった信仰の簡略化・個人化・日常化	○現代的な信仰の簡略化・個人化・日常化の源流が、人口の流動的な江戸という都市地域でおこった宗教的傾向、すなわち、共同体外（個々人）の祈願が重要度を増し、流行神の出現や現世利益信仰の流行などの現象にあることを理解し、もう一度、近世の江戸の民間信仰の特色を確認する。（近世の民衆の宗教の動向に関しては、第２時限で扱ってある。）	

(4) **評価の観点**　①資料を正しく読みとり、考察することができたか。②近世江戸で流行した信仰の簡略化・個人化・日常化が現代人の信仰の心性といかにつながっているかを理解できたか。③民間信仰が人々の生活に根ざし、人々の心情に関わってきたものだということに気付いたか。④調査や発表をきちんとおこなうことができたか。

(5) **指導上の留意点**　①地域史に時間がとられないようにする。②呪術・占い・妖怪などオカルト的な方向に流れないようにする。③ＶＴＲや資料は具体的な印象を生徒に与えられるように準備する。④時間の都合上、発表は簡単な内容にとどめ、質疑応答は設定しない。

まとめ

今回、研究主題である「国際社会に生きる人間として、自ら課題を追究し、行動する資質を養うための授業展開の工夫」を念頭において、三つのグループに分かれて研究を進めてきた。その中で指導案を作成し、実際に研究授業等を行って改めてわかったことは、“生徒が主体的な学習を行うための指導・援助のむずかしさ”である。個々の事例により、生徒には国際社会を生きていく上で気付いてほしい事象については、ある程度興味・感心を投げかけることはできた。しかし、その一方で、生徒が自ら課題を追求し、行動する資質を養うという点では、その指導のあり方は、さらに作業的・体験的な学習等をどう展開していくか工夫が必要である。生徒一人ひとりが生き生きと活動する授業をつくっていくことは、そう容易なことではない。しかし、そのことが今日的なねらいであり、新学習指導要領においても強調されているところである。今回の研究を契機として、今後も進学を重視した学校においても、基礎・基本の学習を重視した学校においても、生徒が受身にならず、作業的・体験的な学習を重視し、生徒が学び方を学び、生徒自らが主体的に取り組んでいける学習の在り方をさらに追究していきたいと考えている。